

実存的 정신分析と個人心理学

—劣等コンプレックスの問題を中心に—

瀧崎直美

- I サルトルの劣等コンプレックス批判
- II 劣等コンプレックスは無意識的か
- III 無意識と自己欺瞞
- IV 劣等コンプレックスと根源的選択
- V 結 び

ジャン＝ポール・サルトルの実存的 정신分析 (psychanalyse existentielle) は、根源的選択 (個人が5歳から10歳頃の時期に、自分と世界との間に結ぶべき関係を意識的に選ぶこと。それ以後に個人が行う一切の活動は、この選択を反映した根源的投企と呼ばれるものの表出と見なされる。) を人格の最根底に位置づけ、それをもとに人間の諸行為を解説しようとする理論である。彼はフロイト派の心理学理論を、リビド一等の、臨床的観察を通して経験的に想定されたものでしかない不確実な根拠に基づいた説という意味で経験的 정신分析 (psychanalyse empirique) と呼んで、自らの理論と峻別する。いわば未来の時点から、それに一致した現在の行動を促す根源的選択を認めるサルトルにとって、最終的には過去に形成されたコンプレックスを個人の行動を規定する主要因と見なす経験的 정신分析は、「未来の次元」を持たない一種機械論的な説だということになる。(cf. EN, p.536)。

ところがその主張に対して、サルトルの説は、

彼自身の分類によれば経験的 정신分析に属するはずのアルフレート・アドラーの個人心理学 (Individualpsychologie) を借用しただけの理論なのではないかという批判がある (cf. SHP, pp109-110, DU, p.267)。確かに、個人は4、5歳頃までに、未熟ながらも自らの判断力によって、劣等感 (Minderwertigkeitsgefühl) を克服するための優越目標 (Ziel der Überlegenheit) と呼ばれる目標を設定し、以後は一貫してそれに即したライフスタイル (Lebensstil) ないしはライフプラン (Lebensplan) という一定の行動様式をとり続けるとする個人心理学の枠組は、実存的 정신分析のそれと非常に似ている。アルフレッド・スターンは、根源的選択 = (優越) 目標、根源的投企 = ライフプラン (スタイル) という明快な図式を呈示しているが (cf. SHP, p.109)、これに従って考えるなら、両者の理論の実質的な違いは、精神の起動力として、あらゆる人間にとって普遍的な劣等感、あるいは劣等コンプレックスをおくか、それともその更に根底にあ

るという自由な根源的選択を措定するかという点に尽きると言えよう。本稿の目的は、この劣等コンプレックスというキーワードを一つの手がかりに、実存的精神分析と個人心理学の比較考察を試みることである。

I サルトルの劣等コンプレックス批判

実存的精神分析の理論によれば、ある人の人格を作り上げているあらゆる要素は、根源的選択に基づいてその人が意識的に選びとったものである。劣等コンプレックスもその例外ではない。サルトルは劣等コンプレックスを「私の原初的な企てが、他者の企てのただなかで、私自身を劣等者として選ぶこと」(EN, p.550)として理解する。劣等コンプレックスはサルトルにとって、根源的選択に先立って存在するものでもなければ無意識的な形成物でもない。劣等コンプレックスもまた世界の中で他者と向かい合う際の、その人自身の対自存在による自由投企の一つであると見なされる。つまり、ある人が劣等コンプレックスに苦しんでいるとすれば、それはその人が自ら「劣った者であること」を選んでいながらに他ならないということになる。そもそも自分が劣等であると認めること、すなわち劣等感を感じることは、その人が前もって「劣った者であろう」とする組織立った計画の体系を持っていることのあらわれであるとサルトルは考える。「たとえば、疲労に屈するということは、歩むべき道に《踏破するのに困難すぎる道》という意味を持たせることによって、歩むべきこの道を超越することである。(中略)《俺はみにくい》《俺は馬鹿だ》等々というような認知でさえ、もともとは先きまわりである。この場合、問題なのは、私のみにくさについての単なる認知ではなく、女の人たちや社会が私のいろいろな企てに対して提示する

逆行率を把握することである」(ibid. p. 537)。

それにしても、劣等コンプレックスが自由な選択によって選ばれたものであるとすれば、なぜわざわざ劣っていること(ex. マゾヒズム等の不面目)を選ぶ必要があるのか。それは、その劣等性によって、対自存在としての自己の実存から逃れる為だとサルトルは説明する。この場合マゾヒズムとは、自分を不安にさせるその人自身の自由を消し去るべく、対自存在としての自己を、対他存在、他者から見られた自己の中に吸収させる、という根源的投企のあらわれであると解することができる(マゾヒズム=対他存在に完全に同化するために、自らの主体性、自由を捨て去ろうとする態度。cf. ibid. p. 551)。「それゆえインフェリオリティ・コンプレックスは、他人の面前における劣等者としての私自身を、自由にかつ全体的に投企することである。インフェリオリティ・コンプレックスは、私が私の対他存在を引き受けることを選ぶときのしかたであり、他人の存在というこのうちがちがたい躓きに対して、私が与えるところの自由な解決である」(ibid. p.537)。

しかし劣っていることを選ぶといっても、人は自分が選んだその状態に嫌悪や絶望を感じているのだから(そうであってはじめて「劣等感を持っている」ことがわかるのである)、それに満足している訳ではない。なぜ望んでもいないものをわざわざ選ばなければならないのか。サルトルは、他の領域でならそこそこの仕事ができるのに、なぜか不向きな仕事に固執して、当然ながら劣等感に苦しむという場合を例にとる。私のこの劣等感、不向きな仕事に固執することが原因で起こる。なぜそんなものに執着するのか。それは私が、凡庸なその他大勢の一人として集団の中に埋没してしまう危険を冒すよりは、むしろ「びり」になることを、あるい

は（目指すべき即自—対自としての）存在に到達する手段として、落胆と羞恥とを選んだのである（cf. *ibid.* p.551）。けれども行動領域として自分の劣っている分野を選ぶことができるためには、まず、この領域で優れた者であろうと意志することが必要である。例えば、ことさらに劣等な芸術家であることを選ぶためには、必然的に、偉大な芸術家になろうという反省された（*réfléchie*）意志を持たねばならない。そうでなければ「劣等な芸術家」という意識が生じるはずはないからである。「劣等性の選択は、意志によって追求される目的と、獲得された目的とのあいだの隔りをたえず実感することを含んでいる。偉大であろうと意志し、劣った者として自己を選ぶ芸術家は、ことさらにこの隔りを維持する。彼は、ペーネロペーのように、昼間作ったものを、夜破壊する」（*ibid.* pp. 551—552）。劣等であることを選ぶとは、私が意志的に求める偽りの目標（ex. 偉大な芸術家）と、現実を得られた結果との間の「隔り」を実現し続けることであるとサルトルは言う。かくして劣等コンプレックスとはサルトルにとって、自発的な意識（自己についての非反省的意識）が追求する真の目的（ex. 劣等な芸術家になる）を認知しないことを意志する（ex. 自分はあくまで優れた芸術家を目指しているのだと考える）という自己欺瞞の構造によって説明されるべきものなのである。

以上のように、「かかる劣等性の根本的な認知」（*ibid.* p.552）が存在することを認め、その劣等性についての深い感情を補償したり、隠蔽したりするために、様々な態度や行動が錯綜して用いられていることを容認するという点までは、サルトルもアドラーと同じ見解である。その上でサルトルは、次の三点を挙げて両者の相違としている。

1) 劣等性の根本的な認知（＝自分の態度や行

為の真の動機は劣等感であるという認知は無意識的であるとはいえない。アドラーがそこに劣等コンプレックスを位置づける無意識と意識という二つの次元の差異は、根本的な非反省的意識とそれに従属する反省された意志の差異として理解されなければならない。

2) アドラーの用いる検閲、抑圧、無意識という概念は、全て自己欺瞞に相当するものである。

3) 劣等コンプレックスが認知されるとすれば、その認知そのものが一つの選択である。よって劣等コンプレックスの根底には、劣等であることを選ぶところの、更に深い一つの志向が認められる（cf. *ibid.* pp.552—553）。

この三点について順に考えてみよう。

II 劣等コンプレックスは無意識的か

言うまでもなくサルトルは無意識の存在を要請するフロイトの説を認めていない。フロイトは本来一つの全体でしかない心を意識の領域であるエゴと無意識の領域のエスに分離して対立させ、エゴはエスの発動する無意識的衝動にさらされるのみで、これを理解する力はないと考える（cf. *ibid.* p.89）。しかしサルトルによれば、フロイトの言う無意識は決して意識とは別な精神過程ではない。例えばある人がシガレットの数を数えている時、彼が対象的に意識しているのは「12本ある」というシガレットの客観的性質だけで、自分が物を数えているということ自体は意識されていない。だが、だからといってこの人が自分の行為について無意識的であるということにはならない。この時、ものを数えていることの意識は反省という形で定立（対象化）されていないだけであって、非定立（非反省）的な仕方では自らを意識している。この非定立的意識があるからこそ、ものを数え

ている最中にはそのことを意識していなくても、今何をしているのかと尋ねられた時にはすぐさま「数えています」という反省を行うことが可能なのである (cf. *ibid.* pp.19-20)。根源的選択や投企についても事情は同じである。実存的精神分析はあらゆる心的事実を意識的であると見なす。これらの選択や投企も、意識そのものであるという限りに於いては十分に体験 (*vécu*) され、その意味では完全に意識的である。しかし決してそれが当人にとって認識 (*connu*) されているという意味ではない。むしろ事態は全くその反対である (cf. *ibid.* p. 658)。かくして経験的精神分析が無意識と呼んでいるものは、このような根本的な非反省的意識としての根源的選択や投企のことであるというのがサルトルの見解である。

一方、アドラーはどのような状態を指して無意識と呼ぶのだろうか。1927年の著作『人間の心理学』の中にある無意識についての一節を見てみよう (cf. MK, pp.113-123)。

フロイトと同じくアドラーもまた、無意識とは「精神生活における最強の要素」 (*ibid.* p. 113) であると言う。彼にとっても無意識は、文字通り意識的に理解されることを免れた精神過程である。「意識のなかにあるものは、無意識の反映にすぎず、それどころかしばしばその反対のものである」 (*ibid.*) しかしアドラーによれば、この無意識も意識と同様、精神を全面的にコントロールする個々人の目標と切り離して考えることはできない。そもそも人間の注意力を喚起するのは、意識というよりもその人が持つ興味であるとアドラーは言う。そして興味の喚起は、言うまでもなくその人が目指す目標に即してなされるのである。従って人が何かについて無意識的であるという時、それはアドラーにとって、その人の注意力がその事象に及んでいないことを、つまり彼がその事象に関心

を持っていないことを意味する。要するに人は自分の目標に関わりのない、あるいはその目標にとって都合の悪い内容を選んで「無意識的」になるという訳である。アドラーは自惚れの強い人に限って自分の自惚れに気付いていなかったり、逆に自分が非常に謙虚に見えるように振舞っていることさえしばしばあるという例を挙げている。それは彼によれば、自惚れの強い人が自分の自惚れに気付いてしまえば、全ての人々に勝る者としての自己の優越を楽しみたいというその人の (立派とは言えない) 目標が損ねられてしまうためであるという。なぜなら自惚れた人間である自分を優れた者と見なすことはできないからである (cf. *ibid.* pp.113-114)。ここには先に見た「劣等な芸術家になる」という根源的選択を実現するために、反省的意識のレベルでは「偉大な芸術家になりたい」という偽りの目標を意志する時のそれと同じ意識過程が認められる。サルトルが示す「無意識=非反省的 (根本的) 意識」「意識=非反省的意識に基づく反省的意志」という図式はこの場合非常に的確であると言えよう。

劣等感が「無意識化」つまりコンプレックス化される過程もこれと同じ仕方でも説明されている。自分が劣っていると意識してしまえば「全ての人々に優越する」というその人の目標が傷つくことになる。「劣等感是一般に弱さの印や恥ずべきものとして見なされているため、当然ながらそれを隠そうとする強い傾向が存在する。実際、隠蔽の努力は非常に大きいことがあり、そのためその人は彼のありのままの劣等感を意識することをやめてしまい、その感情がもたらす結果と劣等感の隠蔽に役立つあらゆる外面的な細部に完全にとらわれてしまう。個人は非常に巧みに彼の精神をこの仕事に向けて訓練するので、下から上へ、すなわち劣等感から優越感へと絶えず流れるという彼の精神生活の

全傾向が自動的に生じ、それでいて彼自身の注意を逃れているのである。従って我々がある人に劣等感を持っているかと尋ねる時、しばしば否定的な答えを得るというのも驚くべきことではない」(PN, p. 2)。

「人間の心は意識を支配する能力を持っている(ということ)、すなわち、精神の動きの立場にとって必要であるときには何かを意識的にさせ、逆に同じ目的のために必要であると思われるならば、何かを無意識的にさせるという能力を持っている(ということである)」(MK, p.117)という記述からもわかるように、無意識を「精神生活における最強の要素」と呼びながらも、アドラーが重視しているのはむしろ意識の次元であると思われる。よって無意識的であることの意味や劣等コンプレックスについての上の解釈は、そのままサルトルの自己欺瞞の過程に重ね合わせることができる。自惚れた人間であることを他人から指摘された自惚れ屋は、少しも自分が自惚れているとは思わないと言いながら、それでいて何とか話題を転じ、逃げだそうとする傾向を示すとアドラーは言う(cf. ibid. p.114)。なるほどサルトルが例えば検閲について批判するように、自分は自惚れているという意識、自分は自惚れた考えを持っており、それが「抑圧さるべき傾向の意識であること(について)の意識」(EN, p.91)が存在しなければこのような態度は生じ得ないはずである。

Ⅲ 無意識と自己欺瞞

サルトルの自己欺瞞とはいわば自分自身に対してつく嘘である。この時、自己欺瞞を犯す者は「欺く者」であると同時に「欺かれる者」でもあるのだから、「欺く者」としての主体は相手である自分を騙していることを知っていな

ければならず、「欺かれる者」としての主体は自分が作った嘘を、その嘘を作ったのは自分だという事実から目をそむけながら信じていることになる。従って自己欺瞞を犯す者は、虚偽を信じてながらも自分が本当は真実から逃れようとしていることに気付いていると考えなければならない。しかるにフロイトはこの自己欺瞞の代わりに「あざむく人のいない虚偽」(EN, p. 90)、全く自覚されることなくはたらく機能である無意識や抑圧、検閲を立てる。そのためフロイトの理論に従うなら、「欺く者」としての主体(=無意識、抑圧、検閲)と「欺かれる者」としての主体(=エゴ)は全く別の存在だということになってしまう。この場合私とは無意識的な要因に騙され、その虚偽を本心から信じてしまった犠牲者であるエゴのことであって、私に盗みを強いる無意識のことではない。サルトルが無意識等の概念を否定するのは、それらの存在を認めてしまうと自己欺瞞を自己欺瞞として認識することができなくなってしまうからなのである。

さて、サルトルの批判の仕方からすればアドラーも(おそらくは比較的初期の研究に於いて)検閲、抑圧という用語を自らの理論の一部として用いていると思われるのだが、その用例がどの著作に見られるのかは今のところ筆者には確認できていない。1931年の論文『個人心理学と精神分析学の諸相違』はこれら二つの理論を対比させ、検閲やエディプス・コンプレックス、ナルシズム等の精神分析学の主要概念を個人心理学の見地から解釈するものだが、アドラーの主な論点は、これらの概念をあらゆる心理学事実の基盤と見なすフロイトに対して、これらを更に深層から支える「下から上を目指す努力」の存在を要請することにある(cf. SSI, p.206)。

サルトルは検閲を無意識的な作用とするフロ

イトの説を退け、検閲が機能するためには自らの機能についての意識、つまり抑圧されるべき衝動を見分けることの意識を持つことが不可欠だと主張する。自己について無知であるような知を考えることはできない。「むしろわれわれは、『あらゆる知は、知（について）の意識である』と言おう」（EN, p.91）。同様にアドラーも検閲の無意識性に疑問を呈する。「誰が検閲を作り出し、導くのか。検閲は（意識と無意識の）どちらの見解に従って働くのか」（SSI, p.206）。意識と無意識を一元化するアドラーのこの傾向は次の一節にも明らかに認められる。「心の（すなわち）知性、感情、適応力の発達は、全て自我の発達に於いて、創造を始める自我として考察されなければならない……検閲とは自我であり、ライフスタイルであり、あらゆる大人と子供の創造力なのである（ibid.）」。そうなるこの検閲は、自分に対してつく嘘という意味では正に自己欺瞞的であるということが出来る。なぜなら「そのようなもの（＝検閲）が存在するとすれば、それが何らかの無意識的衝動をある目的のために隠蔽し、変化させるという場合にのみ、そのものは意味を持ち得るはずである」（ibid.）からだ。ただし、だからといってアドラーの検閲の解釈がもともとサルトルの自己欺瞞説と全く同じものであったと考えるのは早計に過ぎる。というのは、アドラーによれば検閲がそのために奉仕する「目的」とは常に、高い自己評価を維持し、強化することではなければならないからである。それはこの目的が、アドラーにとっては全ての人間が持つ生得的な傾向であり、一方サルトルは単なる経験的に想定された所与でしかないとしてその普遍性を否定する「劣等感からある種の優越へと逃れようとする」（ibid.）下から上を目指す努力に付随するものと考えられているためである。

さて、アドラーの言う無意識状態がサルトルの自己欺瞞と同じ構造を持つことは先述の通りだが、更に付け加えればこの無意識（および意識の双方）を支配する目標そのものについても同じことが言えるのである。この目標は特に『神経質性格について』（1912）等の初期の著作の中では「仮構的目標（fiktive Ziel）」という名で呼ばれている。

当時のアドラーは神経症患者が示す様々な症候を、彼らが自らの劣等感を補償するために設けた、安全や力を獲得し、自尊心を強化するという仮構的目標に到達するための努力と解し、この運動は健康な精神にも共通であると考えていた。神経症患者も健康な人も、力や安全という同じ目標を目指して活動することには変わりはない。両者の違いはその目標へと向かう運動の激しさの程度差に過ぎない。つまり正常な人は神経症患者ほど自己の目標を強調せず、独断的に主張しない、また神経症患者ほどがむしゃらな仕方目標に到達しようとはしないというだけのことである。そしてアドラーによれば、この差は神経症患者が正常な人のそれよりも大きな劣等感を持っていることによるのだという。

ところで、様々な研究者達が新カント派の哲学者、ハンス・ファイヒンガーがアドラーに与えた多大な影響について言及しているが、この時期のアドラーが頻繁に「仮構的」ないしは「仮構」という言葉を用いたのもファイヒンガーの影響によると考えられている。この仮構という概念自体は、もちろんファイヒンガーが現れる以前から知られ、用いられてもいたのだが、アンリ・エレンベルガーが評するように、彼の独創性は「科学において仮構が果す役割を明示し、仮構（Fiktion）と仮説（Hypothese）の違いを明確に定義した点」（DU, p.253）にあると言える。その著作『かのよりの哲学（Die Philosophie des Als ob）』

(1911)によれば、仮構と仮説の本性は全く別である。仮説はそれが真実であることを実証されてはじめて有益な科学的知識として認められることができる。その正しさを実証できない仮説は無益であり、捨て去られるしかない。ところが、これに対して仮構は真実である必要も、真実らしく見える必要もない。「仮構は経験の吟味をうけるものではなく、それが有用であると思われるあいだは保持され、役に立たなくなるとたちまち捨てられたり、もっと上等の仮構と取り替えられたりする種類の言葉のあやである」(ibid. p.254)。

アドラーの仮構的目標もこれと同様に、主観的な自己判断を源に生じる多少とも主観的な仕方採用された目標という意味で仮構的と呼ばれる。だがアドラーの目標は、その意味に加えて、普通は決して当人によって意識されることのない、いわば隠された目標という意味でも「仮構的」なのである。そして彼は、この隠された仮構的目標こそが無意識の主要な内容であると考えていた。「神経症患者と同様に健康な個人も、世界像と彼の経験をいくつかの仮構に従って組織立てておかなければ、世界の中で(とるべき)方向を示してくれるものを持たずに進まねばならなかったであろう。(中略)これら(の仮構)は信念や理想、自由意志にとっての至上命令となるが、それ以上に(これらは)全ての心理学的メカニズムと同じく秘密のうちに、無意識の中で(im Unbewußten)有力に機能するのである」(NC, p.15)。

ではなぜこの仮構的目標は意識を逃れることができるのだろうか。それはこの目標が、自らにとって不都合な事象を無意識化するだけでなく、必要とあらば目標自体をも無意識化することのできる力を持っているためだとアドラーは言う。「最終的目標とその目標のあらゆる誇張的変形は、それが現実と衝突することによって

行為を不可能にする場合には無意識的なままでなくてはならない。意識が生きてゆく手段として、自己の統一性と自己理想を守るものとして必要になるところでは、それ(目標についての意識)は適切な形と程度に於いて現れることになる。(中略)だが神経症的な目標は、普通それがあまりにも激しく共同体感覚(Gemeinschaftsgefühl, 他者の福利をも含めた幸福を求める、アドラーによればあらゆる人間に潜在的に備わった気質)と衝突するために、意識的になることによって自らを破壊してしまいかねなくなるや、この目標は無意識の中にライフプランを形成するのである」(IPA, p.233)。

あるいは1914年の論文『個人心理学、その諸前提と成果』には次のような説明も見られる。「これ(仮構的目標)は我々の思考器官の無意識的な技術に従うものであり、観念的な究極的補償として理解されるべきである。仮構的目標は不明瞭でたやすく曲解されてしまう。それは測られるということができない。この目標は不十分な、そして明らかに有能とはいえぬ諸力によって作り上げられているからである。これは真の实在を持たず、そのため完全には理解されることができないのである」(ibid. p.93)。仮構的目標は子供の極めて不完全な判断力によって作られているので不明瞭で歪められやすく、確固とした実像を持たず、そのため明確に把握されることができないから意識化されないという独特な視点が認められることに注目すべきであろう。仮構的目標の「無意識的」な性質が、ここでは明らかに意識のレベルに於ける現象として捉えられていることがわかる。

ともあれアドラーの考える無意識もサルトルのそれと同様、意識の作用の側面に他ならない。「無意識とは(中略)我々の心の無意識的な、あるいは潜在意識的な奥底ではなく、我々の意識のうちのある部分、我々が十分には理解

していない意味のことなのである」(ibid. p. 232)。アドラーにとっても無意識は何ら意識と対立するものではない。確かに、ある意識内容を意識全体の脈絡、その人の意識が目指す一貫した目標から切り離して考察するという誤った仕方では分析するならば、そこに意識と無意識の違いに相当するような相違を認めることもできよう。「だが意識を解釈することを学ぶ者は、意識とて無意識と同じ位理解されていないかも知れない、換言すれば、意識も後者と同じ位無意識的なままであるのかも知れないという見解の真価を認めるのである」(SSI, pp.215-216)。

IV 劣等コンプレックスと根源的選択

劣等コンプレックスの根底に、劣等なあり方を選ぶところの更に深い志向性である根源的選択が認められるか否か。実存的精神分析と個人心理学の違いを考える際、この点は非常に重要であろう。アドラーは劣等感を全ての人間にとって不可避の感情であると見なす一方で (cf. SL, p.48)、劣等感の認知に際しては、個人が行う自分の状態についての理解や自己評価が大きな役割を果たすことを認めてもいる。

エレンベルガーはアドラーが劣等感と言う時には、「子どもが大人と背の高さを較べた時のような自然な劣等性や、病気の結果生じる実際の劣等性に関する」客観的な認識という意味と、主観的な価値判断、彼の表現によれば「個人が自己自身について述べる『より少ない (minder)』『価値 (Wert)』の判断」という意味がこの言葉の中でないまぜにされてしまっていると示唆する (cf. DU, p.235)。この指摘に従うならばアドラーのいう劣等感の発生過程は次のようにまとめることができるだろう。人間はだれしも無力といえる状態で生まれてくるのだが、

未熟な判断力しか持たない幼児が自分の状態を客観的に判断できるなどということはまずあり得ない。(これは大人にとってさえ難しいことである)。しかも自分が無力であるほど世界はより大きな障害として映る。より大きく見える障害を前にすれば、自己評価はいきおい悪くならざるを得ない。そんな訳で「(生得的な) 気質や客観的な経験や環境よりも重要なのは、これらについての主観的な評価なのである」(IPA, p.93)。アドラーの劣等感とは主にこの主観的な、大抵の場合正確ではない自己評価のことであり、やがてその劣等感を補償するために(これもまた主観的な)ある目標が選ばれることになるのである。

劣等感ないしは劣等コンプレックスの本質を個人が行う不完全とはいえ自由な判断に見る視点は、このように個人心理学に於いても認められると言うことができよう。しかしアドラーの理論は幼児期とは克服すべき劣等で不満足な状態であると前提することから始まっているため、結局は劣等感をあらゆる人間にとって普遍的な要因と見なさざるを得ないのである。この特徴はアドラーの理論が不満足な時代である幼児期を克服し、より満足のできる状況を目指す前方志向に基づく一方、フロイトの理論は同じ幼児期を絶対的に幸福な黄金時代と見なし、人間は生涯この過去の状態に戻りたいと望み続けて生きるという後方志向に基づいているとするアンスバッハー夫妻のコメントを通して明らかに認めることができる (cf. ibid. p. 116)。

V 結 び

サルトルは1969年に受けたインタビューの中で、精神分析学はいわば折衷主義の思想 (une pensée syncrétique) だと評している。フロイトは精神現象を生物学的、生理学的な機械論

の枠組で捉えようとしたために、精神分析学の理論に於いては機械論と目的論がないまぜにされてしまっている。精神分析学には生物学や生理学の言語が用いられているため、いきおいフロイトは精神の諸現象を単なる事実としてだけでなく、精神の持つ（生物学的ないしは生理学的な）機械論的なはたらきとして語ることになる。その結果、精神分析学が呈示する諸概念は往々にしてある時には目的論を表し、別の時には機械論を表すという曖昧さに陥っている。このような曖昧さを認めることはできないというのがサルトルの批判の主旨であった（cf. SIX, pp.105-106）。

この批判は精神分析学だけでなく、個人心理学に対しても向けられていると考えるべきであろう。アドラーも『存在と無』に於けるサルトルと同様、個人はその独自の判断力や創造力（Schöpferische Kraft）によって自己のあり方を決定すると述べている（cf. IPA, pp.176-177）。「環境は、まさに当人がその環境を理解するかぎりにおいてしか、いいかえれば当人が環境をして状況たらしめるかぎりにおいてしか、当人のうえにはたらきかけることができないであろう」（EN, p.660）と言うサルトルと同じくアドラーも「同じ環境からの影響が誰か二人の個人によって同一の仕方とらえられ、再びなぞられ、消化され、反応されるなどと誰が言えるだろうか」（IPA, p.176）、「客観的なことが重要なのではなく、その人がどう感じるかが重要なのである」（MK, p.174）として、環境が個人に与える機械論的な作用を否定する。また『情緒論素描』（1939）等に認められる、情動は心理-生理的な無秩序などではなく、何らかの目的性を持った意識の表出であるという議論は、情動を優越目標を目指すという一貫した目的性を備えた行為の一つに数えるアドラーの理論に非常に近い（cf. MK, pp.307-

330）。しかしそれと同時に、環境に適応し劣等感を克服するための努力という「下」から「上」へと向かう普遍的な運動の基線を想定したり、共同体感覚という明らかに生物学的な機能を介在させたりといった、サルトルの理論が正に批判の対象とする側面も個人心理学には認められるのである。

ただこの批判の是非を問うことはそう簡単ではない。というのは、サルトルの理論は対自存在としての人間理解を基盤とする存在論の次元で展開されている一方、個人心理学は人間を、これに無数の影響を及ぼす宇宙から切り離すことのできない存在として捉えることから出発しているという具合に、両者の議論は全く異なる種類の基盤に基づいているからである。しかもサルトル自身が晩年に述べているように、人間に全き選択の自由が与えられているなどは考え難い。人間に外界から与えられる様々な制約は、『存在と無』で論じられているような具合に自分の意志で好きなように受け入れたり拒んだりできるものではないからである。そもそも個人の主体性といっても、個人は様々な社会的決定（幼少時の家族関係、その時代の制度等）を内面化し、その内面化されたものを行動や選択の中で再び外面化しているのだから、その人のあらゆる行為は必然的に彼をその内面化された社会的決定に再び向かわせることになるはずだ（cf. SIX, pp.101-103）。

最後に、実存的な精神分析と個人心理学はそれぞれ基盤を異にする理論であるとはいえ、やはりサルトルは個人心理学の目的論的な枠組から少なからぬ影響を受けていたのではないだろうか。それにしても、スターンが非難するようにサルトルが「自己欺瞞的」にアドラーからの影響についてあえて言及しなかったという訳ではなさそうである（cf. SHP, p.110）。エレンベルガーはある人物の天才や独自性が承認される

際の基準に関するいくつかの説を紹介しているが、中でもベルナル・グラッセによるものが上の事情を最も的確に説明していると思われる。彼によれば、天才とは昔からずっと存在していたのに誰一人それに気付かなかったものを発見し、言葉で表現する能力のことである。アドラーの劣等感の概念がたちまち常識に組み込まれてしまったように、こうした発見はたちまち一般的な常識に組み込まれ、それが最近発見されたという事実は忘れ去られてしまうのだという (cf. DU, p.272)。またエレンベルガーが付け加える次の逸話もこの種の事情をうまく表していると言えるだろう。「あるときフランツ・シューベルトは、洗濯女たちが彼の作曲した歌曲を歌っているのを耳にした。彼は彼女たちがどこでその歌を教わったのかと尋ねたところ、彼女たちはそれがその地方で昔から歌われていた古い民謡だと答えたというのである」(ibid.)。

*本稿は筆者の修士論文『実存的精神分析と個人心理学 — サルトルとアドラーの理論をめぐって』の一部を再構成したものである。

引用文献

*資料名冒頭のアルフアベットは引用させて頂いた文献の略称、引用文中のアンダーラインと()は筆者による補足である。

EN = 『存在と無 (I II III)』 J-P・サルトル (松浪信三郎 訳) 人文書院 (ページナンバーは仏語テキストに従う。) (Orig. *L'Être et le néant, Essai d'ontologie phénoménologique.* Jean-Paul Sartre. Paris: Gallimard. 1943)

S IX = Situations IX. J. -P. Sartre.

Paris: Gallimard. 1972

SHP = Sartre, His philosophy and psychoanalysis. Alfred Stern. New York: Liberal Arts Press. 1953

NC = Über den nervösen Charakter: Grundzüge einer vergleichenden Individualpsychologie und Psychotherapie. Alfred Adler. Wiesbaden: Bergmann. 1912

SL = Sinn des Lebens. A. Adler. Wien: Rolf Passer. 1933

IPA = The Individual Psychology of Alfred Adler: a systematic presentation in selections from his writings.

A. Adler. Ed. Heinz L & Rowena R. Ansbacher. London: Allen & Unwin. 1956

SSI = Superiority and Social Interest: a collection of later writings.

A. Adler. Ed. H.L. & R.R. Ansbacher.

Evanston: Northwestern Univer. Press. 1964 (論文集)

PN = Problems of neurosis: a book of case histories. A. Adler. Ed. P. Mairet. London: Routledge & Kegan Paul. 1929

MK = 『人間知の心理学』 A.アドラー (高尾利数 訳) 春秋社 1987 (Orig. 1927)

DU = 『無意識の発見・力動的精神医学発達史 (下)』 H.エレンベルガー (木村敏・中井久夫 監訳) 弘文堂 1980